

●著者紹介●

- ①氏名……田中耕司(たなか・こうじ)。
- ②所属・職名……国際協力事業団ミャンマー国イェジン農業大
学能力強化プロジェクト・チーフアドバイザー。
- ③生年・出身地……一九四七年、大阪府。
- ④専門分野・地域……東南アジア研究・熱帯農学。
- ⑤学歴……京都大学大学院農学研究科(農学専攻)博士課程中退。
- ⑥職歴……京都大学農学部助手、同大学東南アジア研究センター
助手・助教授・教授、東南アジア研究所教授・所長、地域研
究統合情報センター長、京都大学退職後、同大学白眉研究セ
ンター長、学術研究支援室長を経て、二〇一五年一月より
現職。
- ⑦現地滞在経験……農学部助手時代から退職まで中国南部、東
南アジア諸国、インド、バングラデシュ、スリランカ、マダ
ガスカル等で長期・短期の調査に従事。
- ⑧研究方法……調査地域の「履歴」を描くために、フィールドで
の観察とインタビュー等を実施。
- ⑨所属学会……東南アジア学会、日本熱帯農業学会、生き物文
化誌学会。
- ⑩推薦図書……桑子敏雄『西行の風景』(NHKブックス、一九九
九年)。

書評

箕曲在弘 著

『フェアトレードの人類学』

——ラオス南部ポーラヴェーン高原に

おけるコーヒー栽培農村の生活と協同組合』

(めこん、二〇一四年)

藤倉達郎

本書の起点は、一見、素朴な疑問である。フェアトレー
ドは生産者の役に立っているのだろうか？ 消費者は、
フェアトレードのコーヒーを買うことによって、途上国の
生産者の収入と生活の向上を助けることができる、と喧伝
されている。しかし、たとえフェアトレードの制度がしっ
かりと作られているとしても、計画通りの報酬が末端の農
民まで届き、それがその人たちが貧困を克服する力になっ
ているのだろうか？「そんなにうまくいくわけではない」と
いうのが本書の著者の直観であった(二頁)。だが一方で、
著者は、フェアトレードを含む、ボランティア活動やNP
O・NGOを通じた社会運動に「ある種の期待と憧れ」も
持っていた(二頁)。そもそも、フェアトレードが本当に

現地の人たちの役に立っているのかを、長期のフィールドワークを通じて学問的に調べた研究は少ないようだった。

しかし、それがわからなければ、「フェアトレード運動を批判することも、推進することもできない」（二二頁）。そこで著者は、以前から関心を持っていたラオス南部高原地域における、フェアトレードのコーヒー生産者への影響を、博士論文のテーマに選ぶ。本書は、ラオスにおける計一四カ月間にわたる詳細で緻密な人類学的フィールドワークを経て書かれた博士論文を改稿したものである。

著者はまず先行文献を参照しながら、フェアトレードの生産者への影響を直接的なものと、間接的なものとに整理する。直接的な影響は主に生産者の収入の向上である。間接的な影響は、フェアトレードによって起こされる当該社会の社会関係の変化に関するものである。直接的影響は本書第二部で、間接的影響は第三部でとりあげられ、これらが本書の中心となっている。それに先行する第一部では、フェアトレード運動の歴史と現状、調査地における焼畑からコーヒーへとという生業形態の変遷、および調査対象である三つの生産協同組合についての基本情報が述べられている。

第二部において追求される問いは、フェアトレードを通

じて農民が得る報酬は果たして市場で得られるものよりも多いといえるのか、そしてその利益は家計収入全体の何%になるのか、ということである。調査地の二つの村で、大変な労力をかけた調査を通じて著者がたどりつく結論は、次のとおりである。生産者がフェアトレードの生産協同組合にコーヒーを売ることによって得た報酬と、それを仮にフェアトレードの枠外にいる仲買人に売った場合との間に生じた差額は、いずれの村においても、総収入の五%程度である（二三―四五頁）。さらに多くの生産者は、組合と仲買人の両方にコーヒーを売っているという状況も明らかになる。いずれにしても、これらの事例に関しては、フェアトレードが生産者に大幅な収入の上昇をもたらしていない、というのが結論である。

社会関係への影響をとりあげる第三部では、調査地における双系的な親族制や権力や威信のありかたや（第七章）、仲買人と協同組合との関係（第八章）が論じられる。コーヒーの買い付けにおいて、協同組合と競争関係にある仲買人は、往々にして高利貸でもある。協同組合活動を通して、生産者が仲買人から自由になる、というのも市民運動としてのフェアトレードが持ちうる目的である。しかし著者はまず仲買人が機能と権力を持ち続けているのはなぜか

を明らかにしようとする。仲買人はコーヒーの代金を即金で支払い、また一年でもっとも食糧が不足する時期に（高利とはいえ）融資してくれる唯一の存在である。またかれらは豆を大量に買い付けることによって、取引における交渉能力も持っている。さらに、著者は外部のNGOからの働きかけでつくられた協同組合が、実は仲買人の力に依存しながら設立され、運営されていく事例を論じている。第七章においては、この協同組合が、政府の政策という逆風や、内部での相互不信などのなかで、解体へと向かう過程が、参与観察と緻密な聞き取りに基づいて詳細に記述される。そこに描かれるのは、市民社会組織への参加による住民の「エンパワーメント」などという抽象的な物語とはまったく違う、生々しい社会関係の有り様である。

このようにラオスの調査地の事例に関して、フェアトレードの直接的影響についても間接的影響についても、著者は否定的な結論を導いている。しかし、評者にとつて興味深いのは、そのような否定的結論を述べながら、にもかかわらず、本書が進むにつれて、著者のフェアトレード運動へのコミットメントが増し加わっているように見えることである。

調査方法について述べた節（序章・第五節）で、著者は

調査の前半には政府関係者にも現地の人たちにも「自分は学生であり、フェアトレードとコーヒー栽培について学んでいる」と繰り返し説明したという。しかし調査後半には、調査地の協同組合からコーヒーの買い付けを行っていた日本の株式会社オルター・トレード・ジャパンと行動を共にすることが多かったため、農民からは買取業者とみられるようになったかもしれないと書いている（四三頁）。当初は学生として、農民から比較的自由に話が聞けたが、後半にはそれが変わってしまったかもしれない。一方で買取業者と行動をしなければ得られなかったであろう詳細な情報を得るといふ肯定的な側面もあった。ここでは、これは「参与観察調査の可能性と限界」を示す「反省的」な情報開示として述べられている（四四頁）。

しかし、終章においては、たとえば、安易なステレオタイプを超えて、ラオス農民の日常生活のロジックを理解する必要を述べたあと、「これはフェアトレードの運動を進めていく上で、決定的に重要である。フェアトレードの実践者たちは、小規模生産者がいかなる社会関係のなかにおかれているのかをつぶさに観察し理解していかななくてはならない」という文章が書かれている（四二〇頁）。これは一人のフェアトレード実践者から、他のフェアトレード実

読者に向けて書かれた文章のようである。なにが起こっているのだろうか。

繰り返しになるが、この研究の当初の問いは、フェアトレードがラオスのコーヒー生産者に、どの程度の恩恵をもたらしているのか、ということであり、著者はそれについて客観的で説得的な（否定的）結論を示している。しかし、本書はそこにとどまらない。

著者は「あとがき」で、民族誌とミステリー小説の類似について述べ、調査地における人とコーヒーと金をめぐる謎を、著者が丹念に解いていく過程を、読者が追体験できるように書いたと言っている（四一六頁）。しかし、この謎解きのプロセスを通じて、著者が理解を深めたのは、現地社会の人間関係や、コーヒー取引をめぐるミクロな政治についてだけではない。

終章において、著者はフェアトレードの「フェア」という言葉について論じている。フェアという言葉は一般に「分配における公正」と理解される（四三三頁）。しかし、ラオス農村での協同組合リーダーたちとの会話に触れながら、かれらにとっての「フェア」は「対等な関係」のことであると論じる。かれらは汚職や虚偽にみちた日常のなかで、この困難な対等性を希求しているのである（四三四

頁）。そして、その意味でのフェアは、フェアトレード認証機構の定める基準にしがっているだけで実現できるものではない。農民の声に耳を傾け、そこからフェアトレード実践の仕組みを再構築していく必要がある、と著者は主張する。つまり、著者はこの研究を通して、そしてそのなかでのコーヒー生産者やフェアトレード実践者たちのかかわり合いを通して、フェアトレード運動とそれが目指すべきところについての、より深い理解とコミットメントへとも導かれているのである。

「あとがき」のなかでは、調査終了後に、著者がオルター・トレード・ジャパンのラオス事業アドバイザーとなり、第九章でとりあげられた生産協同組合の自立支援のプロジェクトにかかわっていることが述べられている。すなわち、この本の主題であるフェアトレードの影響についての記述に加えて、主題化はされていないものの、人類学者が、その探求を通じて、対象へと——農民の生活世界へと、フェアトレード運動へと——まきこまれていく様子を垣間見ることができるとも、この本の魅力である。

ただ、この本の緻密で詳細なスタイルは（著者自身も述べているとおり）、この本の弱点でもありうる。四〇〇頁を優に超える、決して読みやすいとはいえない文章を読み

通すには、ある程度の時間と忍耐力が必要である。しかしすでに述べたとおり、専門家にとっても一般の読者にとっても、読む価値のある本である。さらに希望をいえば、(こ)うやって博士論文を出版しおえた) 著者に、これからはもつと自由な文体と、さまざまな媒体で、この話のつづきを聞かせてもらいたい。

●著者紹介●

- ①氏名……藤倉達郎(ふじくら・たつろう)。
- ②所属・職名……京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・教授。
- ③生年・出身地……一九六六年 京都府。
- ④専門分野・地域……人類学、南アジア地域研究、とくにネパール。
- ⑤学歴……アーモスト大学教養学部卒業(人類学専攻)、イェール大学法科大学院修士課程修了LLM、シカゴ大学大学院博士課程修了PhD(人類学)。
- ⑥職歴……二〇〇五年から京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科助教授、二〇〇七年から、同准教授。二〇一一年から同教授。
- ⑦現地滞在経験……ネパール、大学院生および現地学術NGOの研究員として、調査・研究のため計五年間。アメリカ、学部生・大学院生として計一一年間。
- ⑧研究方法……参与観察。
- ⑨所属学会……日本文化人類学会。日本南アジア学会。American Anthropological Association. Association for Nepal and Himalayan Studies.
- ⑩研究上の画期……ネパールの毛沢東主義者による一〇年間の「人民戦争」とその後の和平プロセス。暴力と自由の問題が前景化した。
- ⑪推薦図書……グレゴリー・ベイトソン『精神の生態学』(佐藤良明訳、新思索社、二〇〇〇/〇二年)。